

# 地域に学ぶ個を育てる

## ～地域のひととの出会いを力に変える子どもを育てる～

矢出 大介

社会科は、ひととの出会いを楽しみ、地域との主体的なかかわりをもとうとする子どもを育てることが大切だと考えた。そこで、自分たちに身近な地域とのかかわりの中でよさを実感し、地域との主体的なかかわりをもとうとする子ども、和歌山（地域）を大切にしている子どもを育てたい。子どもたちは社会科を通して、地域を大切にすることの素晴らしさを実感していった。本実践でも、ひととの出会いを大切に、子どもから生まれたハテナや発見から課題をみんなで追究していった。地域に住むこだわりをもった大人に出会うことで、自分もそのようになりたいと考えて、課題に対して学習を進めたことにより、多面的に追究することができた。

キーワード：ひとり学習 有機野菜 ひとの出会い 体験的な学び 自己の生き方 複合的な学び

### 1. 研究の目的

社会でたくましく生きる個を育てるには、子どものころに多くの体験的な学びをし、様々な職種の魅力的なひとに出会い、感動して学ぶことが重要である。このような複合的な学びは、長期的な記憶として子どもの記憶に残り、これからの自己の生き方をより良い方向に導くと考える。体験的な学びや出会いの後、表現活動を組み入れて振り返り、そこで感じ、考えたことを全体学習体験や出会いをただの体験で終わらせるのではなく、経験へと高めるための実践を研究していく。そうすることで、地域のひととの出会いを力に変える子どもが育つのではないかと考える。

#### 1. 1. 地域教材の魅力

子どもたちが生活している地域を教材にすることは、子どもたちの知りたい・もっと学びたいという追究する意識を高めてくれる。また、子どもたちが自分たちの住む地域の様子に関心をもち、そこに暮らし、こだわりをもって、働く人々と直接的なかかわりをもつ中で学び、自らの思いや願いを表現していく。そして、課題を追究し続ける主体的な活動が、地域について真剣に考え大切に思う心につながっていくと考える。こうした地域教材の魅力を以下の3点で捉えた。

- 1 子どもたちにとって身近であり、親近感を持ち、その中で生活することのよさを感じることができる。それにより地域を大切にしている気持ちが高まり、地域の発展を願う気持ちを培うことができる。
- 2 直接体験を伴った見学や調査をすることが容易であり、様々な魅力的な人々と出会い、活きた資料や情報を収集するなど、インターネットや本だけでなく多様性をもって地域教材を活用することができる。

3 自分の生活にとって切実感があり、体験を生かして考えて判断することができる。

これら3点が、地域教材の魅力であり、これらの条件を満たす学習を1年間の学習の柱として計画した。

この学習を通して、地域に住む多くの魅力的なひとに出会わせることで、子どもたちは、課題に対して深く追究したり、多面的に考えたりすることができた。

#### 1. 2. 魅力あるひととの出会い

何が起こるか分からない社会でたくましく生きる子どもに育っていくためには、魅力あるひとに出会うことが重要な要素である。魅力あるひとに出会うことで、「自分もこうになりたい。」「自分ももっとがんばりたい。」「大人になったらこんなことをしてみたい。」など、社会に出ていくことに希望をもつことができると考える。そして、出会いをより効果的にするには、指導者になってもらえるようなひととの最初の出会いが、とても重要だと考える。教師が子どもの学びをみとらずに一方的に出会わせるのではなく、何か問題が起こったり、子どもたちだけでは解決が難しい壁にぶち当たったりした時に魅力的なひとと出会わせる。疑問や問題を解決するためには、どうすればいいのかを投げかけ、子どもたちの中から、「このひとに聞きたい。」と声が上がってきてから、そのひとに出会わせることで、学ぶ意欲が高まる。

また、いきなり出会うのではなく、事前にみんなでどのようなひと（年齢・性別・性格・見た目など）を話し合ったり、想像して絵に描いたりすることで、会うことが待ち遠しくなる。そして、出会った時の、印象も強く心に残る。初対面の状況でも、子どもたちなりに何か思いをもって接することができる。ひととの出会いを楽しみにし、その出会いをきっかけに視野・

価値観を広げ、自己の生き方を変えることもできると考える。そして、その魅力的なひとが地域にいたことがきっかけになって、地域を大切にしたい気持ちも高まる。

### 1. 2. 1. 消防団Kさんとの関わり

3学期は地域の安全を守ろうと努力している消防団員のKさんに出会った。Kさんから消防団員としての思いを聞いたり、どのような活動をしてしているのかを聞いた。地域には消防士以外にも消防団という人たちが自分たちの地域を守っていることに知った。実際に、消防団の倉庫を見せてもらったり、質問をしたり、防火のためのアドバイスをもらった。その中で、Kさんが、地域を守るために何かをしたいことや、一緒に活動する団員が減っているので、少しでも仲間を増やしたいという思いなどを聞くことができた。

子どもたちは、消防士の仕事を学んでいたため、防火の活動の大変さを知っていた。そのため、自分の仕事をしながら、地域の安全のために活動をしているKさんへの憧れをもつことができた。自分たちも、地域のために何かしてみたいと思うことができた。

### 1. 2. 2. 野菜農家に関わる人との出会い

2学期は畑で働く人々の仕事の学習において、Gさんや野菜を育てることへの思いを大切にしているひとたちに出会った。野菜を売るためだけに育てているのではなく、地域の人の食生活を守ることを大切にしている人たちの思いを聞いた。Gちゃんファームに行った時には、Gさん以外で地域の農業振興に従事している人や、慣行栽培をしている農家にも出会った。それぞれのひとが安心・安全な野菜を育てたい、農家になる人を増やしたい、食料自給率を高めたいなどのそれぞれ違う思いをもっていたが、野菜作りを通して地域を大切に考えていることを知った。農家の仕事について学びたいと考えている自分たちのために熱い思いで接してくれるひとに出会うことができた。この出会いから、子どもたちは何気なく食べていた野菜に色々な人たちの思いが詰まっていることを感じるようになった。野菜を通して地域を大切にしたい人たちの出会いを通して、地域のつながりの大切さも学んだ。

### 1. 2. 3. 指導者となってくれる地域のひと

地域の魅力あるひととは直接会うことにより、学びを深めてくれる素晴らしい指導者になってくれる。そのことが、子どもたちにとって、学ぶための大きなエネルギーになる。素敵な出会いが、人々の願いやこだわりを知るきっかけとなり、その思いに応えたい、近づきたいと子どもの追究する気持ちが高まり、学び合

うことができる。心を動かされる出会いは子どもの記憶に長期的に残り、その子の生き方にも影響を与えてくれる。

## 1. 3. 自分たちが憧れをもつ農家

子どもたちが素直に憧れをもって学習に挑むことのできる教材として、有機野菜農家Gちゃんを取り上げた。

出会わせ方として、子どもが心から憧れをもって学習に臨めるように考えた。そこで、1学期から3年A組は総合的な学習の時間を活用して、校内に学級園とは別に3Aファームという農園をもって、野菜を育てた。その中で、野菜を育てる難しさや収穫する喜びを経験した。その経験を活かして有機野菜農家のGちゃんと出会って学習を進めることにした。

Gちゃんは、利益よりも食べてくれる人が喜んでくれる野菜作りをしている。また、自分が食べたいような安心・安全でおいしい野菜作りをこだわっている。3年A組の子どもたちが野菜作りを知っていることを知って、子どもたちの学びを深めるために意欲的に協力してくれた。子どもたちが野菜作りをしているということが有機野菜作りをしているGちゃんの心を動かしたのである。

単元の中で、Gちゃんファームを2度見学させてもらい、自分たちの農園も見てもらった。

自分たちが学んだことを地域にも発信することによって、相手意識をもつだけでなく、自分たちの思いは直接伝わり、自分たちががんばれば地域のために何かできるのではないかという期待をもってこれからの学習を進めるきっかけになると考えた。

子どもたちは、農家の野菜作りに対する思いに寄り添いながら調べ学習を進めていくことで、「地域の人たちのことを大切に考えているからこそGさんは農家を続けているのだ。」と感じるようになった。それは、ある子が、「Gさんの野菜は高いのになぜ売れるのだろうか。」と言ったことに対して、「Gさんは地域の人のことを考えて野菜を育てているし、そのことを知っている人が増えてきているから。」と発言したことで気付くことができた。多様な考えが出てきたが、子どもたちは、野菜農家とでの出会いを通して地域のひとたちがつながりの大切さ、自分たちの生活は多くの人たちに支えられているということを知ることができた。自分たちもGさんのようになりたいと感じた子どもも多かった。

## 2. 学び方の研究

### 2. 1. 学び方を学ぶ

3年生の社会科では、学んでいく対象を作業的・体験的な学習や問題解決学習を通して、感じたことを中

心にできるだけ具体的な「もの・こと」を大切に、学び方を身につけるような学習の工夫を考えた。また、子どもの考えが多面的になり、より深く追究できるように「ひと」との出会いを重要と考えた。「学び方を学ぶ」ために、発表、調べ方など、3年生の発達段階に沿った指導をしていった。発表においては、他者意識を大切に、他人に自分の考えを分かりやすく伝えることを第一にすることを徹底した。そのために調べてきた資料や自分の思いを整理させた。調べ方においては、インターネットや本だけに頼るのではなく、自分の目で見たり、実際にひとから話を聞いたりするなど自分の足で稼ぐことを第一とした。それにより、調べたことから何かを感じて自分の考えをもつことの大切さを伝えた。

子どもたちは、野菜作りをしていく中で、水をしっかりとあげていても大きく育たない時には、本やインターネットで調べるだけでなく、実際に知り合いの農家に聞いたり、畑を見たりするなど、足で稼ぐ調べ学習の大切さを実感した。そして調べたことに基づいて実践することで、成功体験をすることもできた。これにより子どもは感動して学ぶことができ、長期的な記憶として残ることになると考えた。また、その実践を友だちに伝えることでお互いの喜びを共有する素敵さも実感することができた。

## 2. 2. ひとり学習と全体学習の充実

社会科において、「子どもが学びをデザインする」ためには、ひとり学習と全体学習が相互に関連しながら、さらに深めていくことが重要だと考える。ひとり学習を進めていく上で、子ども一人一人をしっかりとみとり、評価することが大切になってくる。そして、その評価やみとりに基づいて、その個をどのように育てたいのかという明確な視点をもって、個に応じた指導をすることができる。それにより、主体的にひとり学習をするための支援をしていくことが重要である。個をしっかりと理解することで、個が育っていく。全体学習において、調べ学習を通して蓄積してきた自分の考えを発信することで、考えを明確にすることができる。そして、友だちと話し合いを進める中で、自分の考えを見直したり、深化させたり、発展させたりしながら、お互いの共通点や相違点を探することができる。これにより、クラスみんなで課題を共有することができる。つまり、ひとり学習を充実することで、全体学習で自分の考えを修正したり、深化させたり、発展させたりすることができることを実感させる。それにより、ひとり学習の必然性が明確になり、意欲的に調べ学習ができると考えている。また、自ら意欲的に課題を追究し、自分で新たな問題を発見し、問題解決の過程で友だちと学び合うこと自分を見つめ直し、自己の生き方をよりよいものになるようにつなげていけ

る。

## 2. 3. 様々な職業のひととの出会い

上記でも示したように子どもにとって魅力あるひととの出会いは、今後の生活に大きな影響を及ぼしてくれる。子どもたちは、自分の親以外の職業についてあまり知らないことが多い。社会の教科書に農家やお店で働く人の仕事も載っているが、教科書やインターネットを活用することで知識を得ることはできるが、どのような思いをもって仕事をしているのか想像するのが難しい。つまり、学んだことが実際の生活に活かすことが困難になる。すべての学びにおいて、実際に働いているひとに出会わせることはできないかもしれないが、子どもの生き方や考え方を大きく変えられる可能性のあるひとと出会わせたいと考えて単元を構成した。今回は、年間を通して魅力的な人たちとの出会いを中心にして年間計画を立てた。1学期はスーパーマーケットEのHさん、2学期は有機栽培にこだわりをもって農家をしているGさん、3学期は地域の安全を守っている消防団のKさんと出会わせた。

それぞれ違う職業のため、異なる考えのようだが、すべてのひとに共通していることがある。それは、利益のためだけでなく、未来ある子どもたちのために働いていること、自分の仕事に誇りをもっていることであつた。多くの子どもは、このひとたちとの出会うことで、他者のために生きることの素晴らしさを学んだ。また、仕事に対する考えの幅も広げることができた。全員が、自分の将来の夢（仕事）を書くことができるようになった。



(図1 調べたことを実践する子どもたち)

## 2. 4. 体験学習のよさ

体験的な学びの良さは、五感を使って複合的に学ぶことができることだと考える。これにより、子どもたちは心を動かして学びに向かうことができ、その一つ一つの学びが長期的な記憶として残る。今回の実践に

おいても、どのようにすれば子どもが感動して学んでいけるのかを考えて実践していった。

野菜作りでは、学校の敷地内の広い畑を開墾することから始めた。そして、4～5人グループで土地をもって、自分の育てたい野菜を育てた。これにより、それぞれが自分の土地（野菜）に責任をもって育てる。また、自分たちの努力次第で立派な野菜を育てることができるというやりがいももてると思った。実際に育ててみると、本やインターネットで書いている通りにはなかなかいかない。がんばったつもりでも枯れてしまうグループもあった。それこそが、子どもが学べる機会だと考える。子どもたちは、なぜ枯れたのかを考え、次こそは枯らしたくはないと考えて切実感をもって野菜作りに取り組んだ。野菜農家のひとに聞いたり、立派な野菜を育てている畑を見て研究したりするなど、自ら進んで学んでいった。そして、それを実践し、上手く育った時には、同じグループの友だちと喜びを共感し、美味しい野菜を味わうことができた。（図1）

自分事として捉えやすい課題が生まれてくる。子どもたちは無農薬・有機栽培にこだわって育てたので、害虫が大量発生したり、肥料不足によってあまり育たなかったことなど多くの課題に出会うことができた。

### 3. 授業実践 紀州野菜Gちゃん

「Gちゃんファームの野菜は高いのになぜ売れるのだろうか」という課題について話し合った。新鮮さについて話し合う場面。

- かず （写真を見せて）Nファームは虫に食われないけど、新鮮じゃない。
- あきこ 無農薬でおいしいから売れる。
- みき 他の多くの農家の野菜と違うから食べてみたくなって買うのだと思う。
- ゆか 農薬を使っていない野菜を買うのは、子どもが健康でいられるから。
- じゅん かず君はNファームの野菜は新鮮じゃないって言ってたけど、そんなこともないと思う。
- かず Gちゃんファームの野菜は農薬を使わなかったり、有機肥料を使っていたりしているから新鮮。
- 教師 新鮮ってどういうことなのかな。
- りんこ 新鮮っていうのは野菜とかが新しくいきいきしている様子。
- こうた 野菜などがとれてすぐのこと。
- かず 言っていることは分かるけど、やっぱりGちゃんファームの野菜の方が新鮮。

### 4・単元の考察

着目見だったかすが、新鮮についてこだわりをもった場面である。かずは3A農園では有機肥料を使って野菜を育て、Gちゃんの有機野菜作りへの思いに寄り

添って学習を進めてきた。クラスの中でも、Gちゃんへの憧れが強い児童の1人であった。

かずは友だちの考えを聞いてそれなり納得しているが、完全に納得していない。また、納得させようとするりんこ、こうたは新鮮についての的確に伝えている。しかし、この場面において、かずのこだわりはGちゃんの野菜への思いに寄り添ったからこそ出てきた考えだった。彼は、頭では新鮮についての意味は理解しているが、実際に育てている野菜を見て、Gちゃんの思いを知ったからこそ感覚的に納得できていなかった。

この場面で、かずが新鮮さについてどう考えていくのかを問い返すことで、Gちゃんの野菜作りへの思いや作業のことを想起するなど、子ども同士の思いを伝え合うことができた。

辞書などに書かれている知識ではなく、体験したからこそ出てくる言葉をもっと大切にすべきだった。そのような学びを積み重ねることで対象とどっぴりつかれる個が育つ。また、新たな課題意識を深化する個が育つのではないかと考える。

### 5・成果と課題

「たくさんのおひとと出会い、多くの体験をして、ひとと出会うことが楽しくなりました。自分の知らないことを知れる楽しさを感じました。こだわりをもって働いているひとってかっこいいと思いました。これからも多くのひとと出会いたいと思いました。」

今まであまり知らなかった仕事をこだわっているひとたちに出会い、そのひとたちに寄り添っていった子どもたち。自分の目で見て考えることの大切さを実感していた。そして、自分たちの地域の中に誇りをもって仕事をしているひとがいること知り、自分の地域をより好きになることができた。自分たちも地域のために何かしてみたいという認識をもつことができた。子どもたちの書いた作文から、みんなが社会に出ていくことに期待をもつことができていることが分かった。これからも、地域の未来を大切に考えて自ら考えて行動する心が育つことを期待している。

子ども一人一人がどのような願いをもって学習に向かっているのかをみとり、どのように支援・評価していくべきなのかをもっと明確にして授業実践をしていきたい。

### 参考文献

- (2010) 和歌山大学教育学部附属小学校紀要 No. 34  
(2011) 和歌山大学教育学部附属小学校紀要 No. 35  
(2012) 和歌山大学教育学部附属小学校紀要 No. 36  
(2013) 和歌山大学教育学部附属小学校紀要 No. 37  
(2014) 和歌山大学教育学部附属小学校紀要 No. 38